

渴望続編

そして人となる

谷内 純一



私の父(故人)は大正時代に小学生でした。香宗小学校の遠足の行き先はしばしば夜須町手結の浜だったそうです。学校から片道約6kmの道のりで、紺の着物におむすびを風呂敷に入れてたすきに掛け、二列縦隊で歩いて行った。途中岸本町を通ると町の人びとは「あ、遠足が来よう」と、帰るときには軒ごとに柄杓(ひしゃく)に水を入れて出して

てくれていたという。私はこれを聞いたとき、岸本の人達は何んて優しいんだらうと感動しました。ところで前号で述べたように、私と友人が校長先生に炎天下に立たされ、最後まで水を飲ませてもらえなかつ

たときに、私たち二人に自分の水を分けてやろうという同級生、上級生は一人も居ませんでした。でも、それは普通のことでしょう。

もしもあのとき、私たちに水をわけてやろうとした人が居たとしたら、優しさや勇気や智慧を兼ね備えた人、それはまさしく天才であると思えますね。そう、さらに天才はいないのです。

してみると、柄杓に水を入れて接待をしようとした岸本の大人達は天才であるということになります。岸本の大人たちも子供の頃は天才ではなかったと思う。でも優しい優しい天才になりました。これがおとなになるとい

うこと、人となるということなのだと思います。

山上憶良は「銀(しろかね)も金(く)がね)も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも」(万葉集803)と子どもが金銀玉以上の

仲間

感謝



隆彦の通夜・葬儀にはコロナの流行時

にもかかわらず200名超の方が会葬くださり、家族一同感謝に堪えません。高退協の皆さまも三〇名も参加頂きありがとうございます。あの元気な人が83歳でこの世を去るとは信じられま

宝であると歌ったが、大人こそ宝であるというのを私は指摘したいのです。そして身近にやさしい天才の居ることに気づきました。

子ども食堂を開設したIさん、Kさん、困窮した人びとの支援に力を尽くしたMさん、Kさん。私は深く頭を垂れます。そして私も人とならなければと思うのです。

せん。2年前にふとしたことから腓臓に異変が見つかり、医大で精密検査の結果、初期の腓臓ガンと診断され手術を受け、元の生活に戻り忙しくしていました。1年後に再発しました。腓臓ガンは今の医学では完治が難しく、5年生存率は

7〜8%、1年内の再発率は80%というガンの王者です。入院を繰り返して、出来得る限りの治療を受けましたが、ガンの進行を防ぐことが無理とわかった時、在宅医療に切り替えました。6月から家で家族と一緒に生活し、お見舞いに来て下さる方と談笑し、週1回の在宅医と毎日2回の訪問看護師さんのお世話になりました。

食べ、マグロの上ト口の寿司やノンアルコールのビールも口にしてご満悦でした(病院では決して食べさせてはくれません)。

眠りからまだ完全には覚めない時、隆彦「350万円を用意したか」美佐子「なに?そんなお金ないよ」隆彦「俺の口座から引いておけ」と言うたろう「美佐子」そのお金何に使うが?「隆彦」美佐子にやる「無いお金ではありましたが嬉しかったです。彼はシャイで照れ屋です。全退教の旅行に行った時も隣り合わせに座らないので、夫婦であることも分からなかったと言われしました。家では亭主関白でしたが、

ガンの末期は痛みが強いので鎮痛剤の投与をコントロールし、痛みをとることが医療の中心になります。おかげさまで苦しむこともなく、家族に見守られながら穏やかに息を引き取りました。面会もできないコロナ禍の中、在宅で、残された時間を共にできたことに満足しています。手作りの流動食を「うまい」と

まだまだやりたいこともあったでしょうが、これまで高退協の会員として多くの仲間の方々とお付き合いの中で、お付き合いのことで、活動できたことに誇りと感謝の念をもって旅立たことでした。最後に、隆彦の好きだった言葉を引用し、感謝の言葉とします。

学ぶ心は若々し、森羅万象みな師となりて

ありがとうございました。三谷美佐子

哀悼

- 三谷隆彦さん 7月16日
- 尾崎之治さん 7月17日
- 安並千代美さん 7月28日

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。